



# 煙突の思い出 馳星周

わたしは北海道の南部で生まれ育った。海と川、背の低い山、それに牧場以外はなにもないような土地だ。水産物を加工する工場や乳製品の工場はあったが、その規模は微々たるもので、子供ながらに日本の繁栄から取り残されているような気がしたものだ。近く、いつでも車を飛ばして一時間半ほど走れば白老という町で、そこには大きな製紙会社の、と田舎にあっては威容を誇るような工場があった。高い煙突からもつもつと煙を吐き出していた。

その煙は独特な匂いを伴っていて、車や列車が白老の町に近づくと、近隣の人間は判で押したように窓をびしゃりと閉めきつたものだ。わたしの家族や悪友たちがどう思っていたのかは知らないが、製紙工場が吐き出すその匂いを、わたし

はそれほど苦勞することなく受け入れることができた。わたしは当時から本の虫だった。友達が漫画を読んでいる横で文庫本を開き、小説を読み耽っていた。小説はわたしにとっては異世界の扉のようなもので、新しい本を、新しい物語を読むたびにわたしの世界が広がり、新たな表情を見せるようになっていく。それが楽しくて次から次へと本を買い漁り、読みまくった。わたしは本を溺愛していたのだ。

本は紙でできている。本を作るために紙を作るためにあの匂いが必要なのなら、我慢しなければならぬ。わたしはそう思っていたのだ。

わたしは十八で北海道を離れた。すでに東京で暮らした年月の方が長い。わたしは本を読む側から書く側にまわり、自堕落な生活を享受し、いつしか製紙工場のあの匂いを思い出すこともなくなっていた。わたしの実家も母の定年退職を機に札幌に移り、北海道南部に帰ることもなくなつた。

あれは何年前のことだろう。苫小牧という街でサイン会を行うことになった。わたしが通っていた高校がある地方都市で、白老町は隣町になる。ほとんど二十年ぶりの帰郷だったが、苫小牧の街並み



馳 星周(はせ・せいしゅう) 1965年北海道生まれ。横浜市立大学文理学部卒業後、出版社勤務を経て、フリーのライターになる。96年に『不夜城』でデビュー、98年『鎮魂歌(レクイエム) 不夜城』で第51回日本推理作家協会賞(長編部門)、99年『漂流街』で第1回大藪春彦賞を受賞する。主な著書に『M(エム)』『長恨歌―不夜城完結編』など著書多数。

はわたしの記憶にあるものとほとんど違つてはいなかった。パブルからもパブルの崩壊からも取り残された地域なのだ。二十年の時を眠つたように過してきてきたに違いない。

ただひとつ、二十年前と違つていたのは、あの匂いがしないことだ。製紙工場はまだある。煙突もそびえている。だが、あの独特な匂いはどこにもない。眠っていたはずの地方で製紙工場だけが静かに進歩を遂げ、雇用を維持し続け、紙を供給し続けてきたのだ。

サイン会には何人かの同窓生が駆けつけてくれた。製紙工場のことを問うと「そつといえは匂いがしなくなったのはいつからだっけ?」とだれもが首を傾げた。

サイン会を終えた後、わたしは札幌に向かった。車窓から製紙工場の煙突が見えることはなかったが、わたしはあの匂いを懐かしみ、二十年前の本好きな少年に微笑みかけた。

## Let's think together! 地球温暖化を防ぐ私たちの小さな一歩

大切なことは、何ができるかを考えてみることもかもしれない。

2月16日、「京都議定書」が発効しました。これからは各国が2008～2012年のそれぞれの目標に向け、二酸化炭素排出量の削減努力を続けていくこととなります。しかし、二酸化炭素の排出量が多い国の離脱や、今後、排出量の増加が見込まれている国々には削減義務がなく、その効果に対して疑問視する声も挙がっています。



地球温暖化を防ぐ一助として、自分にも“何か”ができるんじゃないかと考えている人たちも多いと思います。

私たち紙パルプ産業に携わる者もその一人です。地球規模でみんながこの問題について考え始めることができれば……。どんなに小さな一歩でも、それを積み重ねていけば必ず達成することができる。そう信じて私たちは小さな歩みを進めていきます。

家庭で、オフィスで、古紙リサイクルの輪、広げよう!



今回は7月7日号、山田五郎さんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>